山本序周『女源氏教訓鑑』——江戸の『源氏物語』梗概書

目　次

はじめに――読者の皆さんへ ……3
『源氏物語』略説 ……4
『女源氏教訓鑑』凡例 ……5
『女源氏教訓鑑』『源氏物語』五十四帖 ……6

桐壺 6　箒木 8　空蟬 10　夕顔 12　若紫 14　末摘花 16　紅葉賀 18　花宴 20　葵 22
賢木 24　花散里 26　須磨 28　明石 30　澪標 32　蓬生 34　関屋 36　絵合 38　松風 40　薄雲 42
朝顔 44　少女 46　玉鬘 48　初音 50　胡蝶 52　螢 54　常夏 56　篝火 58　野分 60
行幸 62　藤袴 64　真木柱 66　梅枝 68　藤裏葉 70　若菜上 72　若菜下 74　柏木 76　横笛 78
鈴虫 80　夕霧 82　御法 84　幻 86　匂宮 88　紅梅 90　竹河 92　橋姫 94　椎本 96
総角 98　早蕨 100　宿木 102　東屋 104　浮舟 106　蜻蛉 108　手習 110　夢浮橋 112

解説 ……117
一　『女源氏教訓鑑』概要―出版意図と編著者 ……117
二　『女源氏教訓鑑』における源氏物語 ……122
三　本書所引古注釈一覧 ……140
四　『女源氏教訓鑑』書誌 ……140
参考　翻刻資料 ……143
付論　往来物としての『女源氏教訓鑑』 ……146
あとがき ……158

はじめに――読者の皆さんへ

山本序周『女源氏教訓鑑』（以下『女源氏』）は、江戸時代、婦女子が教育や教養を身に付けるために編まれた「往来物」と呼ばれるものの代表的な著作の一つです。内容は、例えば、「女教訓寶草」などに見られる処世訓や戒め、日常生活上の心得、あるいは茶道や活花などの作法等の実生活に即したものから、小野小町物語に始まり、和歌の知識や手紙の書き方など教養・たしなみに属するものまで多岐にわたっています。しかし何と言っても特筆すべきは『源氏物語』五十四帖の梗概を付し、それを本書の中心に据えたことです。

内容は、古くから伝えられている各巻の代表歌に即した梗概をすべて二〇行（平均一行二五字前後、従って一巻五〇〇字程度）に収め、さらに挿画一面を加えています。あの大部な『源氏物語』をこれほど僅かな分量にまとめ、『源氏物語』の全梗概を紹介しようとする手並みは、到底凡庸の筆のなせる技とは思えません。

『源氏物語』のあらすじや梗概を紹介した本は、昔から枚挙に遑がありませんが、残念ながら、いくら読んでも妙に頭に残らないという経験をしたことはないでしょうか。それは現代語で書かれているがゆえに、読む速度が速過ぎ、何の引っかかりもなく流されてしまうからです。それに対して『女源氏』は、当然文語文で書かれていますので、まずそれだけで現代人は読む速度が落ち、じっくり手探りに似た感じで読みすすめていくことになり、自然頭の中に、心のうちに刻まれていきます。しかもここが肝心なことですが、『女源氏』の文章は、現在あるいはその昔、高等学校で学んだ古文よりはるかに平易で、読みやすく書かれています。

江戸時代には、堂上貴族（公卿）の手になる嫁入り本としての豪華な写本がいくつも作られましたが、それとは別に夜ともなれば、月明かりか、わずかな灯火しかない中で、こうした版本『女源氏』に読み耽っていた庶民の生活に思いを馳せ、楽しんでみてはいかがでしょうか。

『源氏物語』略説

書名　主人公光源氏の生涯を語る物語という意味で、『紫式部日記』や『更級日記』に「源氏の物語」と呼ばれた。『源氏物語』という書名は五十四帖の総称で、元来は各巻に外題としての書名（巻名）が付されているだけである。

作者　紫式部。生没年不詳。中宮彰子に仕えていたころには、藤式部と呼ばれた。紫式部という呼び名については諸説あるが、『紫式部日記』に、藤原公任が「若紫やさぶらふ」と作者に戯れたという記事があり、この物語作者としての名声とともに定着したのであろう。父は藤原為時、母は藤原為信の娘。いずれも太政大臣藤原良房に連なる名門の家柄で、歴代歌人・学者を輩出した。ことに曾祖父兼輔は歌人堤中納言として名高く、父為時も詩文に聞こえ、紫式部は恵まれた文学的環境の中で成長した。紫式部は少女時代から聡明であったらしく、父の教授する漢籍を兄（弟とも）惟規よりも早く理解し、父の蔵書を次々に読み、向学心を満足させたという。こうして培われた素養が、『源氏物語』の構想や文章の的確な描写に自ずからかかわったようである。一方父為時の長い不遇時代に人生の辛酸を見てきた経験は、その後の彼女の人生観察に影響を与えたものと思われる。

成立　未詳。長保三年（一〇〇一）、夫藤原宣孝と死別後ほどなく執筆を始め、寛弘三年（一〇〇六）、中宮彰子に出仕したころには複数の巻々が書き上げられていた。同五年（一〇〇八）には若紫巻がすでに評判になっていたことが『紫式部日記』によって知られる。執筆は出仕後も続けられ、同年、中宮御産後の還啓にあたり、大規模な清書・製本作業が進められ、寛弘七年（一〇一〇）ころまでには五十四帖の大部分が成立していたと考えられている。

構成　『源氏物語』五十四帖は、一般に三部に分けて考えられている。

第一部　桐壺～藤裏葉　三三帖。源氏誕生から三九歳。一時の失脚を経て、准太上天皇に至る栄華を描く。

第二部　若菜上～幻（雲隠）　八帖。三九歳から五二歳。源氏の晩年と柏木の「もののまぎれ」を描く。

第三部　匂宮～夢浮橋　一三帖。薫一一歳から二八歳。薫と宇治の八の宮の姫君達とのかなわぬ恋を描く。

須　磨

◎うきめかるいせをのあまを思ひやれ
もしほたるてふすまのうらにて（194御息所・贈歌）

（歌意）浮き布を刈る伊勢の海人である私を思いやって下さい。藻塩が垂れるという須磨の浦で。

いせ人の波のうへこぐを舟にも
うきめはからてのらましものを（196源氏・答歌）

（歌意）伊勢人が波の上を漕ぐ小舟に、須磨で浮き布を刈らないで―つらい目に合わずに乗ればよかったのに。

【挿画】源氏、流謫の日々を送る

秋の夕暮れ、源氏は廊に出て、海を眺める。◆須磨謫居の日々、八月十五夜、直衣姿の源氏は高欄近くに出て海を見やる。左手には狩衣姿の良清が控える。砂浜から伸びる松をやや大きく描き、打ち寄せる波の上に雁が飛ぶ。源氏の粗末な住まいを思わせる屋根の廂が見える。

【梗概】右大臣方の源氏に対する怒りは大きく、官位を剥奪された上、流罪の迫っている源氏は、東宮に危害の及ぶことを恐れ、自ら須磨に退去することを決意した。出立を前に、源氏は左大臣、藤壺らと別れを告げ、紫の上に心を残しながらも、三月二十日過ぎ、須磨へと旅だった。源氏は、紫の上や藤壺などの女君と手紙を交わしつつ、須磨でのわび住まいに秋・冬を過ごした。その間、源氏は琴・絵・和歌に侘びしさをわずかに慰めた。明石の入道は、源氏流罪の噂を聞き、この機会に娘（明石の上）を源氏と結婚させたいと望む。年が明けて春、宰相の中将（頭中将）が見舞い、源氏を慰めた。三月上巳の日、海浜で禊をしていた源氏を暴風雨が襲った。源氏＝26～27。藤壺＝31～32。紫の上＝18～19。明石の上＝17～18。

【巻名】詞＝源氏隠退の地須磨による。冒頭近くに「かの須磨は」とある。歌中に「須磨」を詠み込んだ歌は、上記の他二首ある。巻名出所と歌及び挿画が一致せず。

【評】源氏須磨へ退去の報は、たちまちに伊勢の御息所の耳にも達したのであろう。かの伊勢の地から御息所は「憂き目にあっている私を思いやって下さい」と詠む。自ら思い切って伊勢に下向した御息所、やむなく須磨に退去した源氏、彼我の隔てを越えて、源氏は御息所の文に心を動かされた。源氏は、「伊勢にお供をしていれば、こんな憂き目にあわずに済みましたのに」と深い哀切の情を返歌に伝えようとする。

須磨　香図　此巻は哥とことはとをとれり。

源氏廿四歳の秋より廿五歳の春までをしるす。源氏の御兄朱雀院御位の時。花の宴にてあひそめ給ひしおほろ月夜の内侍のことは。みかとの御心さしありけるにけんしのおかし給ふと聞えて。みかとの御母后の御はら立ありて。あしさまにきこえて。なかされ給ふ御さたも有けるゆへ。けんし須磨へうつり給ふにより て須磨の巻といへる也。みやす所より

をくり給ふ御哥へうきめかるいせおのあまを
思ひやれもしほたるてふすまのうらにて○
此心はうきめかるいせおのあまとは。いせにゐ給ふ
ゆへなり。ゆきひらのもしほたれつゝわふとこたへ
よとよめる須磨の浦にて。その心はわかごとくに
うき住ゐより。いせおのあまの住かをも思し召
やれかしとの心也○けんしの御返しへいせ人の
波のうへこぐを舟にもうきめはからてのらまし
ものを○此心はいせへ御とも申たらは波の上こぐ
あやうき目にはあふまし き物をと也○此の巻は
源氏一部の甘文也よく〳〵心をつくへし（12ウ）